

現代中小企業論

高田 亮爾 / 上野 紘 / 村社 隆 / 前田 啓一 編
池田 潔 / 太田 一樹 / 近藤 和明 / 文能 照之 /
秋山 秀一 / 本多 哲夫 著
同友館

評者

関西学院大学経済学部教授
土井 教之



中小企業を取り巻く環境が大きく変化していることはいうまでもなく、同時に中小企業を考察する分析アプローチ・手法もまた変化・進化している。それゆえ、現代の中小企業論がそうした変化をどのように取り入れ展開しているかが注目される。そこで、書評の対象に選んだのが最近刊行された本書である。本書は、学生や政策担当者などを対象にした「現代中小企業を総合的・体系的に分析・考察するテキスト」として刊行され、しかも現場との接点が大い公立研究所で調査研究に従事し、その後大学教員に転じた研究者によって執筆されている。

本書は2部19章から構成され、第Ⅰ部(9章)を「中小企業の基礎的考察」に当て、そして第Ⅱ部(10章)で「経済・経営環境変化と中小企業の新展開」を議論する。まず、中小企業の定義と機能・役割を考察し、中小企業は現代経済で「活力ある多数派」としてその役割は大きいと結論する(第1章)。その中小企業を対象とする研究の展開を、企業間関係に焦点を絞って展望し、大きく中小企業の後進性・問題性を重視する接近と、発展性・効率性を重視する接近があり、今日それらを統一的に把握する接近も登場したことを指摘する(第2章)。そうした二面性をもつ中小企業が抱え

る経営課題として、グローバル競争と技術革新の下でクローズアップされる経営資源不足と下請の不利をあげ、今後の課題として外部資源の活用、自立化、第二創業、事業承継、インターネット活用などを示唆する(第3章)。こうした課題に対応することは「経営革新」であるが、その実態と課題に言及する(第4章)。また、伝統的な「問題性」テーマである下請、労働・賃金、金融の問題を議論する(第5～7章)。最後に、中小企業は、地域という視点から見れば、産業集積、地場産業として地域経済に大きな影響をもつが、その集積メカニズムや企業行動を考察する(第8～9章)。

第Ⅱ部は、経済構造の変化が中小企業に与える影響とそれから派生する課題を取り上げる。まず流通システムや消費者行動の変化が中小流通業に与える影響(第10章)や、グローバル化が中小製造業の生産活動に与える影響(第11章)を考察する。こうした影響から、イノベーションを行う必要があるが、その課題を明らかにしている(第12章)。また、情報化、IT革命に対応する取り組みを考察する(第13章)。経済の活性化には新規開業、特に中小・ベンチャー企業の新規参入が重要であることを考慮し、参入前後での特徴と経営課

題を考察する(第14~15章)。また、流通規制の変化に伴って、中小小売業、そしてそれが立地する「まち」も大きな変化を余儀なくされたが、そのプロセスと経営課題、そしてまた政策課題を議論する(第16章)。さらに、サービス経済化の進展が「業態革新を伴う“内なるサービス化”」を誘引するに伴い、中小サービス業が変化し、また新たな役割・事業機会が生まれることを議論する(第17章)。ネットワークの視点から、従来の協業化・組織化から2000年前後に誕生した「新たな中小企業ネットワーク」まで、その変遷を展望し、そして後者のタイプが地域経済と一体化するなど、「社会性」をもつことを指摘する(第18章)。最後に、中小企業政策の変遷と現況を概観し、その今後の課題を考察する(第19章)。

本書は、テキスト、啓蒙書としての性格上、中小企業および中小企業政策について網羅的に展開している。その意味で、伝統的なスタイル・構成であり、現代の中小企業を俯瞰図的に捉えるには便利であり、したがって、中小企業の全体を理解

したいと思う人や、これからその研究をはじめの人には有意義である。

しかしあわせて、「現代中小企業を総合的・体系的に捉え、論述している」と銘打つ以上、新たな問題や接近方法に言及することも望まれる。ミクロ経済学・産業組織論から中小企業を考察する評者から見れば、もう少し触れてほしい問題がある。例えば、中小企業の成長メカニズム、取引構造、企業組織(組織力は経営資源の1つとして重要)、協業組織・ネットワークのマネジメント(「コーポラティブ・ガバナンス&マネジメント」)、企業再生問題などである。これらも「現代の新展開」である。また、分析方法についても論及が望まれる。例えば、日本の中小企業研究には、欧米で試みられている計量的な分析が少ないが、今後研究が発展するためにはこうした分析も不可欠である。そうした研究の展望が含まれ、そして分析方法のあり方に何らかの示唆があれば、本書はさらに大きな意義をもつものと思われる。次作を期待しよう。